

経絡否定論

米山博久

一 はしがき

経絡説は鍼灸学界の一大勢力である。反証を挙げるものもなければ否定するものもない、この調子ではこの説が鍼灸医学の一般的真理となる日も近いであろう。斯くて鍼灸医学は確立される訳である。詢に芽出度い限りである、当に経絡説万々才である。然し一度目を外に転ずるとき一般医学界に於てはどうであるるか、科学の世界に於てこの説が容易に承認されるであろうか、問題は茲にある。だがそんなことはどうでもよい今日の未完成な科学の承認など受けなくとも我々は我々で独自の経絡の科学を構成するのだと云う人もある様だが是は論外である。少くとも医学一般の場に於て鍼灸治療を位置づけることが鍼灸医学の課題でありその様な観点から経絡の問題が取り上げられているとすればもつと活潑な討論がこの問題について行わねばならぬ、龍野氏は否定論者を異端視されるが鍼灸医学のためには否定論者の登場こそ待望されるべきである。私が敢えてこの小さな抵抗を試みる所以である。

二 私の理解している経絡説

間中氏が云われる様に経絡の概念を大まかに規定しておかないと討論の焦点がぐれで見当ちがいの否定論になるおそれがある、

そこで私は自分の理解している経絡説を一通り記しておくこととする。細かい点に就てはその都度にか明かにしてゆくことにしたい。経絡が古典的概念であることは云うまでもないことである。随つて古典をよまなければ経絡はわからないと云うことになる訳であるが、正直なところ私は古典をあまりよんで居らない。この私の経絡理解が古典のそれと喰いちがつているかも知れない、然しそのことは私にとつて一向差支ないことである、何故なれば私の問題は現在行われて居る鍼灸治療の指針としての経絡説だからである、我々は古典的概念としての経絡の正確な把握に時を費す暇はない、専ら臨床の指針となつてい

るものを問題として取上げることとする。扱て私の理解している経絡とは大体次の様なものである。

人体には気血なるものが循環して、生命はそれによつて保たれる、その循行路が経絡であり経穴はその要衝である、経絡はその主要なものは十四あつて身体を縦走している胸腹部では一対の臓と腑に關係している、但し奇経と稱する横の連絡もある、臓腑に關係する時以外は外部から窺うことの出来る程浅層部を走行する、而してこの循行には虚実がある、臓腑についても同様である、是を経絡の変動と稱して、病の根本の理である、そしてこの気血の循行は陰陽五行の理法に基づくこと天地の理に等しい故にこの理法を心得ずしては経絡を把握することは出来ない。虚実とは五行相生相剋の理によるのである。経絡ではその堅、緊、陷下をもつて是が見ら

れるが集注的には三部九候の脈に表れる、治療は要するにこの経絡の変動を調整することに尽きる、その方法は鍼灸を用いての補瀉の法である、この補瀉の法は主として四肢の原穴によるのであるが是も陰陽五行の理による運用を誤つては成立しない。

三 経絡概念の検討

1. 陰陽五行説と経絡

古典に於て陰陽五行説と経絡の關係は不可分であることは明かである。現在の経絡治療家についてもその治療例等に現れた限りでは同様である。

陰陽五行説は支那古代の素朴な自然哲学であるが、当時の人が臨床上の經驗的事実をそれによつて理論づけたとする説は一面の真理をもつている、古代人の觀察が陰陽五行説的先入観なしに行われたものか、どうかは疑問である、私も経絡説が全く古代人の觀念の所産にすぎないとは考へない、少くとも陰陽五行説と云う眼鏡を通して見られた事実であるか、或は若干の事実を基いて陰陽五行説によつて組立てられたものであることは確かである、随つて現代医学の如く確認された事実を基いて歸納的に構成された学説とは趣きを異にして居る、それは陰陽五行説と云う眼鏡に全く依存しているものであつて陰陽五行説と觀察された事実と云うものは不可分の關係にあるのである、経絡説のあの素晴らしい理論体系は陰陽五行説を支柱として成立している。

事情かくの如くなれば経絡説を承認するや否やと云うことは陰陽五行説を承認出来るかどうかと云うことになる、二十世紀の知性を

このコンテンツは株式会社医道の日本社、著者が有しており、日本の著作権法および著作権に関する国際法によって保護されています。 営利・非営利にかかわらず、複製、複写、コピー、販売、その他の再利用を固く禁じます

もつてしては陰陽五行説の人体の適用は方法論としても事実としても全く妥当性を欠いていと断定せざるを得ないのである。

2. 氣血と経絡

氣血は経絡概念の核心をなすものである、氣血が果して何であるかは未だ定説はない様であるが、血は血液であらうと云う説は最も有力である、氣に至つては全く分らないが、氣血として血の概念の中に包含して考へておくことが便利である、然りとすれば経絡はその循行路として脈管系であらう、古代人が脈動とその内を流れる血液を生命の根本的な特徴と見た考へは首肯出来る。動脈手に応ずるところ即ち潜在的な脈動

或は外見出来る静脈を陰陽五行説の原理に随つて勝手に結び合せたものとも思われる、然し今日の血液及脈管系の知見とは一致しないことは確かである、仮りに氣血を血液とする立場からすればその循行路である経絡は出鱈目である、又経絡を他のもの例は神経の如きものとすれば氣血循行と云うことを否定しなくてはならぬ、要するに氣血と経絡と云うものは互に矛盾して来ることになる、後に見る如く虚実補瀉の概念とも関連して経絡概念から氣血を分離することは出来ない、現今の経絡学者は随つてこの両者を結んだり、離したり都合のよい様に処理しているがこの矛盾を如何に解決するであらうか。

3. 経絡の走行

経絡の走行を単にそれだけとして考へて見るに縦走すること、極めて浅層部を走ること、臓腑との関連の模様等凡てが平面的に取扱われている、是は我々の全く納得出来難いものである、生命現象に於ける

諸関連がこの様に単純なものであれば三部九候の脈診で補瀉を行へば治療は成立するとの結論も出て来るであらうが、生命現象はもつと立体的な統一と関連とを有していることは明かである。

4. 虚実と補瀉

虚実と云う見方は、見方それ自体としては面白いと思ふが、客觀的に實際的に規定することは困難なことである、即ち斯く斯くの所見は虚であり、斯く斯くの所見は実であるとするのは出来ない、全く直觀的なものか、五行相生相剋の理で頭の中

で決めるのである、このことは経絡の大家の間でも臨床上その虚実に対する判定が一致し難いことが多いと云う事実を徴しても明かである。補瀉についても同様なことが云へる。それが虚実に対する方法として極めて主觀的なものである。その實際的方法に至つては他愛もない思い込み過ぎないことは経絡治療を檢討する際明かにしよう。

5. 脈と原穴

氣血を血液と見れば脈診によつて虚実を知るといふことは一応理が通る、然し全身の虚実を三部九候の脈で弁別し得ると云うことは何としても解し難い、寸、関、尺、部によつて脈に多少の違のあることは我々も是を認めるが、それは脈管それ自身に由来するのではなく、その部の浅深筋層、骨状等の条件が加つて居るのである。その様な条件を凡て考慮に入れてしかも尙、脈状の差異を察知することが出来ると云うことは全く至難のことと属する。随つてそれは主觀的な思い込みによる判断にすぎないものとな

四 経絡治療の検討

前項で経絡の概念そのものについて検討したので茲では所謂経絡治療について検討を試みよう。

経絡治療は竹山氏の定義を手がかりとすることが便利である。竹山氏の定義は次の通りである。

「鍼灸術は経絡経穴を診断の場所とし同時に治療の場所としてその虚実を調節するに灸を用い補瀉を行ひ経絡の変動を調節することによつて疾病を治療するところの即ち治療術である」

1. 経絡治療の診断、我々が治療する場合に正確な診断を要することは言をまたない、然らば経絡治療の診断はどの様にして行われ

ているであらうか、それは所謂切脈と切経である、即ち三部九候の脈を窺ひ経絡の虚実を診るのである、竹山氏の云うやうに「経絡の変動以外に病氣を考へない」と云うのが経絡治療の診断である、竹山氏の云うやうなことが出来るであらうか、疾病に於ける数

このコンテンツは株式会社医道の日本社、著者が有しており、日本の著作権法および著作権に関する国際法によって保護されています。 営利・非営利にかかわらず、複製、複写、コピー、販売、その他の再利用を固く禁じます